様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３６００４３

研究課題名（和文）東アジアにおける女性研究者のジェンダー分析および比較研究

研究課題名（英文）Gender Analysis and Comparative Studies for Women Researchers in East Asia

研究代表者
小川　眞里子（OGAWA, MARIKO）

三重大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：００１８５５１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本、台湾、韓国の学生や研究者の統計的データを比較可能となるよう再分類し、さらにはEUとの比較もできるよう調整し、一定程度の成果を収めることができた。しかし日本の統計調査に重大な不備があり、この改善が行われない限り、十全な比較は不可能であることも判明した。
日本の統計の欠陥とは、大学専攻科や通信制課程について専門分野別のデータが不足していること、省庁大学校がISCEDマッピングに含まれていないこと、研究者に関して【男女別】【分野別】【職位別】の三要素を同時に満たすデータがないことである。『男女共同参画白書』の「大学教員における分野別女性割合」も研究者の現状を反映していない。

研究成果の概要（英文）：This research examines gender analysis and comparative studies for women students and researchers in East Asia: Japan, Korea, and Taiwan. We have reclassified the data of three regions to meet UNESCO's classification, or ISCED by broad field and by education level to compare three Asian regions and EU's She Figures. In the process of reclassification, some problems of gender statistics in Japan were uncovered.
First, data on the numbers of graduates in advanced courses and correspondence courses by field of studies are not available. Second, data of schools of government agencies are not included into ISCED 1997 mapping. Third, there are no data of academics, which satisfy respective indexes of sex, field of studies, and grade simultaneously. It is regrettable that the famous bar graphs on the proportion of women academics in White Paper on Gender Equality do not reflect the present gender situation.

研究分野：科学とジェンダー

キーワード：女性学生　女性研究者　ジェンダー　性別統計　東アジア　She Figures　ジェンダー・サミット

１．研究開始当初の背景

アジアの近隣諸国との共同の研究は、平成１９年度３月の報告書『アジアにおける女性科学者・技術者のネットワークの構築』（研究代表者　小川　眞里子　平成１８年度科学研究費補助金　基盤研究（C）（企画調査）課題番号１８６３１０１１　にまとめて以来、ある程度持続的に行ってきていた。ただし、各国で統計の足並みがそろわないので、数量的な比較研究を行うことは難しく、先送りのママであった。また時期的に重なるが、トヨタ財団からも助成金を受けて、インドネシアやフィリッピンの研究者とも研究交流を行ってきた。

しかし、EU や US の研究者から、アジアの女性研究者の実態が全くつかめないという批判が根強くあり、これに応えるために２０１０年度に科学技術社会論学会から受けた柿内賢信記念賞の資金を用いて、２０１２年１月に韓国、台湾の研究者を招いて、２日間にわたって統計資料の擦り合わせを行うべく研究会を開催した（以下　指標会議と呼ぶ）。簡単ではあるが、下記のサイトで研究経過報告を掲載している。

http://jssts.jp/content/view/240/34/

当初から、統計的な数値に踏み入るためには、国としての実態の把握が困難な中国はあきらめ、韓国、台湾でまず研究を進め、将来的にはアジアにおける EU の *She Figures* をめざすのがよいと考えた。

この会議が、一つの契機となって、続く２０１３年度から開始されることになったのが、本科研費による研究であった。したがって当初から目的は明確であり、またそれまでの蓄積から相互に会議に招聘しあう間柄が築かれていたこと、さらに EASTS（東アジア科学技術社会論ネットワーク）の組織活動とも連動して新しい関係の構築に踏み出すことができた。

さらに、小川は２０１３年に台北で開催された ConWIST に招かれ、台湾および韓国の共同研究者とさらに数値的な詰めを行う上での基本方針を明確にすることができた。例えば日本の項目で比較的独立性高く扱われてきた「商船」というカテゴリーをどうするか。これは韓国や台湾の研究者にはとても奇異にうつる項目で、我が国の産業発展の歴史を知らなければ理解できないものであったろう。また韓国で家政学を理学部に含めてカウントしているのも、日本から見るとやや奇異な印象である。これら一つずつをキャンベラ・マニュアルなどに照らし合わせながら統一していこうということになった。

研究当初は、指標会議に出席していた小川、財部、河野そして韓国と台湾の研究者で研究を始めたが、2 年目から学協会連絡会のアンケート調査に関わっていた大坪久子氏の参加を要請した。政府機関の統計の不備は、この学協会連絡会が行ってきた大規模アンケート調査によってかなり補われてきていたからである。また先の指標会議のときにお茶の水女子大学の博士課程の学生として裏方としてサポートしてくださった横山美和氏にも科研に加わってもらうことになった。

こうして、かなり煩瑣な作業を前提とする、統計的な比較を開始し、研究を進めていく道筋を立てることができた。

２．研究の目的

アジアにおける女性研究者の実態について、国内外に発信することを目標としていたので、国内的には、日本科学技術社会論学会の年会で必ず報告を行うこと、また外国への発信としては１．で言及した東アジア科学技術社会論ネットワークの開催に合わせて発表を行うことであった。

また、途中から参加していただくことになった大坪氏からは、理系分野での女性活躍の実態と女性研究者増加に向けた多くの情報がもたらされ、当初のママでは、いわゆる文系の研究者による研究にとどまるものであったが、研究を文理の研究者によって遂行するものとしたことによって、当初の想定より幅広い情報の交換ができて有益であった。大坪氏も、社会学や科学社会学の研究者との連携が目新しいものでよい契機となりえた。

３．研究の方法

国際的な標準に準拠することを目標として方法を確立するには、【分野】と【教育段階】の両面で、国際的な基準に合わせる方法をとった。

日本・韓国・台湾の統計がほぼ揃うのが、２００４年からなので、当初は２００４年から２０１１年までの統計資料で、教育、人文・芸術、社会科学、数学・科学、工学、農学・獣医学、保健・福祉、その他（それぞれ ED、HM、SS、MS、EN、AG、HW、others）として、分類した。これはユネスコが定める国際標準教育分類ISCED-97にできるだけ近づけるよう擦り合わせたものである。

ISCED-97 の分野には、例えば「サービス」という項目があるが、これについては EU の統計資料 *She Figures* に該当項目がないことに鑑み、また日本にもないので、「サービス」はその他に分類し、先に述べた家政についても、韓国、台湾に既存の分類から取り出して、あらたに「その他」への分類を行うよう依頼した。また先に述べた商船は日本独特なもので、韓国と台湾に該当項目はなく、今回は工学に分類した。このようにして、【分野】についてはある程度の擦り合わせを行うことができた。

しかし【教育段階】はそれよりはるかに困難であった。おおまかに統計資料を見ている

限り、大学、短大程度の区分けと、大学院修士課程、博士課程程度の区別であるが、実際には高等専門学校の扱い、専門学校、通信制課程などなど日本だけでもISCED-97に合わせるのは難しい。ISCED０～ISCED４までくらいの初等・中等義務教育は簡単でも、高等教育の分類は容易ではない。詳しくは研究成果として挙げた論文を見ていただきたい。

４．研究成果

平成２５年度は３回研究会を行った。7 月の研究会は、11 月に開催される東アジア STS 学会(EASTS)と日本科学社会論学会年会(JSSTS)の両方に参加する準備を進めた。EASTS は 2012 年には韓国ソウルで開催されており、韓国の Lee 教授が中心となってラウンド・テーブ ル Statistics of Women in Science and Technology Education : Data from Taiwan, Japan, and South Korea を開催した。このとき 3 カ国のデータ収集に不備があることが明確になり、2013 年には、その摺り合わせを行うことに全力を注いだ。東アジアでの合同の研究会というのは珍しくないが、多くの場合それぞれの国の状況報告に終わっている。本科研費の主目的は各国のデータを EU の *She Figures* のカテゴリーに合わせることである。 ９月には小川が 2013ConWiST(台北)に招待され、同地で台湾や韓国のメンバーとさらに打ち合わせを行った。そして今年度の主要行事である 2013, the 11th East Asian STS Conference (東京工業大学 11 月)に参加し、本科研費プログラムに関係する海外メンバーも含め全員でワークショップを開催した。学会開催前日に研究会をもちコメンテーターとして迎えたニューデリーの NISTAD(National Institute of Science, Technology and Development)の上席研究員のニーラム・クマール氏も交えて活発な議論を行った。韓国と台湾からは 本科研費の研究協力者である Eunkyoung Lee 氏と Yenwen Peng 氏を招聘した。この EASTS 会議に引き続き東工大で JSSTS の年会が開催され、こちらは一般講演の部で、研究分担者の河野・財部の両氏が発表を行い、フロアーと の活発な議論を行うことができた。 初年度には女性学生の実態を、韓国、台湾とともに過去 10 年間ほど調査して、その成果を東アジア STS 学会で、3 国共同でワークショップを開催し、日本科学社会論学会では主として日本の問題点について報告を行った。

２６年度は、女性研究者に焦点を 定め研究を行った。 問題はデータの擦り合わせであるが、日本には女性研究者について、【職位別】【男女別】【分野別】の 3 要素を同時に満たすデー タが存在せず、韓国や台湾と比較することができないというのが現状であった。そうした現状は、日本科学技術社会論学会での発表や論文(『貿易風』掲載)で訴えても、あるいはパブリック・コメントの機会をとらえて指摘しても事態は改善されぬままであった。そこで私たち科研グループは、ジェンダーに関係するデータを提供している、文部科学省生涯学習政策局と内閣府男女共同参画局のそれぞれの担当者と面談して、直に現状の不備とそれらの改善を訴えた。その中で、ジェンダー統計の重要性にも気づいていただくことができ、2 つの局が協力して改善へ踏み出してもらえる見通しを得ることができた。これは大きな成果といってよいだろう。その概要は『科学技術社会論研究』に、さらに問題の所在などを詳しく論じたものを『人文論叢』(三重大学人文学部紀要)に掲載した。 もう一つの大きな成果は 3 国の共同作業で完成した統計的研究を、科研メンバーの一人河野がハイデラバードで開催された 世界女性会議で研究発表を行ったことである。統計データが早くから整備されている欧米の国々からは、東アジアからのデータ発信が 待ち望まれており小規模ながら *She Figures* をめざす研究グループの存在をアピールできた。このような国際的な発信は待たれているものである。なお、この成果を国際誌に発表すべく努力しているところである。

２７年度の研究会は２度開催した。基本的にはサイボウズのメーリングリストで様々な合意形成は容易であった。8 月にソウルで開催された Gender Summit 6 に全員で参加しポスター発表を行うとともに、韓国、台湾の研究者および世界規模で参集した研究者との交流を図ることができた。急に決定した本イベントについては、参加の予算を組んでいなかったが、小川は主催者側の招待となり、横山はお茶の水女子大から海外研究発表の助成金の獲得ができて、旅費の支出を抑えることができた。こうした積極的な参加から、2017 年に日本で JST の主催で開催される Gender Summit 10 のコアチームに、わが科研費の関係者から 3 人のメンバーがそれぞれ 3 つの分野で協力することになったのは大きな成果である。また Gender Summit 6 では、JST の主導で参加日本人研究者が一堂に会する場が設けられたので、本科研費の研究成果である我が国の統計データの不備をアピールして問題認識を一定程度共有してもらうことができた。 共同研究の進捗に合わせて科学技術社会論学会で毎年研究成果を発表しており、今年度も行った。最終年度ということで、お茶の水 女子大学ジェンダー研究センター『ジェンダー研究』に共同執筆論文を投稿することにして、分担執筆し、全体的な統一を図って、投稿することができた。今回の共同研究でもっとも残念なことは、韓国、台湾との共同研究で昨年度に英文の論文を投稿したものの、台湾の研究者が多忙で、十分な改稿作業ができなかったことである。国際連携を必要とする論文の完成には、高いモチベーションがないとゴールに行きつか

ないことを痛感させられることになった。幸い、この科研の研究は研究代表を若い研究分担者に交代して継承されることになったので、2016 年度中には データの更新も含め論文の完成を目指す。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　8　件）

①　横山美和、大坪久子、小川眞里子、河野銀子、財部香枝　「日本における科学技術分野の女性研究者支援政策—2006 年以降の動向を中心に」共著『ジェンダー研究』（お茶の水女子大学ジェンダー研究所）第 19 号　査読有　2016 年 3 月　175-191.

②　小川眞里子　「科学と女性研究者」（単著）『ジェンダー研究』（東海ジェンダー研究所）第 18 号　査読無　2016 年 3 月 113-128.

③　小川眞里子　「母性愛と科学」『論集』（三重大学人文学部哲学思想学系・教育学部哲学倫理教室）第 17 巻　2016 年 3 月 15-26　査読無.

④　小川眞里子、横山美和、河野銀子、財部香枝、大坪久子　「東アジアの女性学生・研究者の専攻分野に関するジェンダー分析：EU・日本・韓国・台湾の比較をとおして」　三重大学人文学部文化学科研究紀要『人文論叢』　第 32 号　査読無　15－28　2015 年 3 月.

⑤　小川眞里子、横山美和、河野銀子　「科学および科学技術とジェンダー」『科学技術社会論研究』　第 11 号（速報）　査読無　2014 年　131-134.

⑥　小川眞里子　「ノーベル賞量産国日本で、なぜ女性受賞者が出ないのか」三重大学人文学部文化学科研究紀要人文論叢　第 31 号　査読無　47－59　(2014 年 3 月).

⑦　財部香枝、河野銀子、小川眞里子、大坪久子「東アジアにおける女性学生の専攻分野に関するジェンダー分析—日本・韓国・台湾の比較をとおして—」中部大学国際関係学部論集『貿易風』　第 9 号　152－165　査読無　(2014 年 4 月).

⑧　大坪久子　「男女共同参画学協会連絡会のこれまでの活動と女性研究者支援の今後」『解剖学雑誌』第 88 巻 51－56　査読無.

〔学会発表〕（計　7　件）

①　横山美和、小川眞里子、河野銀子、財部香枝
「科学技術分野における女性研究者増加策の 10 年を振り返って」科学技術社会論学会第 14 回年次研究大会　2015 年 11 月 22 日
東北大学（宮城県・宮城市）.

②　M. YOKOYAMA, G. KAWANO, M. OGAWA, H. OHTSUBO, K. TAKARABE
“Have the Gender Equality Policies Filled the Gender Gaps in the Fields of Science and Technology in Japan?”
Gender Summit 6, Asia Pacific 2015
2015 年 8 月 26 日～2015 年 8 月 28 日
Seoul, KOREA.

③　横山美和、小川眞里子、河野銀子、財部香枝
「東アジアにおける女性研究者に関する研究：その２」科学技術社会論学会　第 13 回年次研究大会　2014 年 11 月 16 日
大阪大学　（大阪府・大阪市）.

④　Ginko KAWANO, Mariko OGAWA, Kae TAKARABE, Hisako OHTSUBO, Miwa YOKOYAMA
“Gender Segregation on Campuses: A Cross-Time Comparison in the Higher Education Sector among Japan, Korea, and Taiwan”　12th Women’s World Congress, 2014, 2014 年 08 月 17 日～2014 年 08 月 22 日 Hyderabad, INDIA

⑤　河野銀子、財部香枝、小川眞里子

「東アジアにおける女性研究者に関する研究」　科学技術社会論学会　第 12 回年次研究大会　2013 年 11 月 17 日　東京工業大学、東京.

⑥ Yenwen, PENG, Mariko OGAWA, Eunkyoung LEE, Ginko KAWANO, Kae TAKARABE
"Gender Segregation on Campuses"
EASTS (East Asia Science and Technology Society)　2013 年 11 月 16 日　Tokyo, JAPAN.

⑦　Mariko OGAWA
"19 Japanese Nobel Laureates, but Women … Why?"
IConWiST (International Congress on Women in Science and Technology) 招待講演　2013 年 09 月 14 日～2013 年 09 月 15 日　Taipei, TAIWAN.

〔図書〕（計　0　件）
〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
小川　眞里子（OGAWA MARIKO）
三重大学・人文学部・名誉教授
研究者番号：　00185513

(2)研究分担者
河野　銀子（KAWANO GINKO）
山形大学・教育文化学部・教授
研究者番号：10282196

財部　香枝（TAKARABE KAE）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：00421256

横山　美和（YOKOYAMA MIWA）
お茶ノ水女子大学・基幹研究院・研究員
研究者番号：　70725267

(3)連携研究者
大坪　久子（OHTSUBO HISAKO）
日本大学・薬学部薬学研究所・上席研究員
研究者番号：　20158801